徳島新聞　令和8年11月10日（火）

ALS早期診断へ新検査法

徳大病院開発　痛み抑え負担減

徳島大学病院の研究グループが、体が徐々に動かせなくなる難病「筋萎縮性側索硬化症（ALS）」の早期診断につながる新たな検査法を開発した。検査時に伴う痛みが抑えられ、患者の負担が減った。早い段階で治療を始めれば、進行を遅らせることができる可能性もある。

ALSの診断には、電極の付いた細い針を筋肉に刺して異常な電気信号を捉える「針筋電図検査」が用いられる。喉や口周りの領域（脳幹領域）を調べるために、舌の筋肉（舌筋）の反応をみることが多い。

しかし、強い痛みを伴う上、意識して舌の力を抜くのが難しいという課題があった。首から肩にかけての僧帽筋などで代用する方法もあるが、脳幹領域の筋肉ではないため、確実性で劣るという。

研究グループは検査をする場所として、口を開けたり食べ物をのみ込んだりする際に使われる「顎二腹筋前腹（がくにふくきんぜんぷく）」〈図参照〉に着目した。



ALSの疑いがある徳島大学病院の患者27人を対象に、顎二腹筋前腹、舌筋、僧帽筋、咬筋（こうきん）の四つの筋肉で針筋電図検査したところ、顎二腹筋前腹で異常を検出できた割合が最も高かった。

このうち、3人は従来の方法では診断に至らず、顎二腹筋前腹の検査で確定することができた。患者に痛みの程度を尋ねた調査では四つの筋肉の中で顎二腹筋前腹が最も痛みが少なかった。

ALSの原因や根本的な治療法は見つかっていない。しかし、病気の進行を遅らせる新薬が開発されており、軽症の状態を保つためにも早期診断の重要性が増している。

同病院脳神経内科の福本竜也特任助教は「早期に確実な診断ができ、痛みを伴う検査の負担も減らせる。検査の実施例を積み重ね、他疾患に応用できるかどうかについても検証していきたい」としている。

（山口和也）

徳島新聞令和８年１１月１０日掲載
コピー、転載禁止